プロタゴラスの人間尺度説
―その歴史的実像をめぐって―

中　澤　　務

１．はじめに

1.1 人間尺度説をめぐる多様な理解

紀元前五世紀の古代ギリシャ世界は，ペルシャ戦争の勝利と民主政の普及などによって，発展の時代を迎えた。そのような時代のなか，ソフィストと呼ばれる啓蒙思想家たちが登場し，活躍していた。プロタゴラスは，最初のソフィストといわれ，当時を代表する思想家であった。そのプロタゴラスの思想を端的に表現していると考えられているのが，「人間尺度説」と呼ばれる短い断片である。その文言は，次のようなものであったと考えられている。

> 万物の尺度は人間である。あるものについては，あるということの。あらぬものについては，あらぬということの。
> πάντων χρημάτων μέτρον έστὶν ἄνθρωπος, τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστιν,τῶν δὲ ούκ ὄντων ὡς ούκ ἔστιν[1)].

この短い一文は，プロタゴラスの著作の冒頭に登場するプロパガンダ的な宣言であると考えられ，プロタゴラスの思想の核心を示す重要な論点を提示するものであることは，疑いのないところであろう。この一文の真意を明らかにすることが，啓蒙思想家としてのプロタゴラスの位置づけを決定するといっても過言ではあるまい。

ところが，この一文の正確な意味を解釈することに，多くの困難が伴うこと

も確かなのである。

第一に，プロタゴラスの著作はすべて失われており，われわれは，ごくわずかな断片しか頼りにすることができない。人間尺度説が表明されていた著作についても，残存断片はごくわずかであり，われわれは，その具体的な内容すら明確には知ることができないのである。

第二に，人間尺度説を伝える同時代の情報源が存在していない。その内容を最も詳細に考察している最も早い時期の情報源は，紀元前四世紀のプラトンであるが，彼は人間尺度説に対して批判的な態度を示しており，そのような観点から人間尺度説を解釈しているのである。そこには，プロタゴラスに対するプラトンの批判的な評価が如実に反映している。このプラトンによる解説を，プロタゴラスの意図を正しく反映したものと見るか否かによって，人間尺度説の解釈は，大きく異なってしまうのである。

人間尺度説に対するプラトンの批判的言説を，そのまま受け入れるなら，プロタゴラスは真理を否定する相対主義者と位置づけられることになるだろう。この評価は，ソフィストはたんなる詭弁家の職業教師にすぎないという伝統的なソフィスト観と結びつく。この場合，人間尺度説は，プロタゴラスがみずからの詭弁術を正当化するために述べた言説であるとみなされることになるだろう。

ところが，プラトンの解説を誤解に基づくものと考え，その証言を信頼しなければ，人間尺度説はまったく別の解釈を許すことになる。それによれば，プロタゴラスが表明しているのは，当時の新しい時代における啓蒙主義的人間観であり，世界を認識して，その価値を作り出していく主体が人間にほかならないことを宣言したものとなる。

たとえば，20世紀初頭に活躍したプラグマティズムの哲学者シラー（F. C. S. Schiller: 1864-1937）は，人間の具体的な経験から出発し，経験を基盤として知識を探求しようとするみずからの立場を人間主義（humanism）と呼ぶ。そして，そのような人間主義の源流をプロタゴラスの思想に求め，そこへの回帰を説いている[2)]。

人間尺度説をめぐる解釈の歴史を振り返ると，20世紀初頭までは，このような人間主義的解釈が支持される傾向があり，プラトンの証言は，むしろ信頼されない傾向があったように思われる[3)]。ところが，20世紀中盤以降になると，状況は一変する。すなわち，プラトンに依拠した批判的な解釈のほうが優勢となっていくのである。

筆者の理解では，こうした変化の背後には，20世紀における相対主義の流行がある。すなわち，プロタゴラスが，現代的な相対主義の歴史的源流と見なされるようになり，人間尺度説も，現代的相対主義に類する相対主義の思想を述べたものと理解されるようになっていったのである[4)]。

こうした観点から，現代の研究者たちは，プラトンの説明をもとに，人間尺度説を相対主義の表明として理解し，その立場に対して，さまざまな現代的な位置付けを与えようとしてきた。それによれば，人間尺度説は，感覚や信念における判断の相対性を主張し，それぞれの判断者の判断を，そのまま真と認める主観主義的な立場であり，真理の相対主義を表明しているという[5)]。

1.2 人間尺度説をどのように捉えるべきか

現代の解釈では，人間尺度説を，現代的な相対主義の枠組を通して理解しようとするが，はたして，そのような態度は正当なものといえるであろうか。筆者は，正当ではないと考える。というのも，現代の相対主義的解釈は，近代哲学の認識論的枠組に依存したものであり，そのような枠組をプロタゴラスに帰属させることは，時代錯誤といわざるをえないからである。

現代の解釈は，プラトンのテキストから，人間尺度説がそのような特徴を持つ認識論的主張であることを読みとることができると考えている。しかし，そのような読み方自体が，時代錯誤の産物であり，解釈自体に無理があると思う。

そこで，われわれはまず，人間尺度説をそのような理論として読むことができないことを明確にしておく必要がある。そのためには，プラトンを中心とした古代のテキストを，そのように解釈することはできないことを明らかにする必要があるだろう。

では，人間尺度説に対する現代の解釈が採用できないのだとしたら，われわれは，人間尺度説をどのような思想の表明と捉えればよいのであろうか。筆者は，現代の解釈が主流となる以前の人間主義的な解釈に立ち返ったうえで，そこに現代の研究成果を加味した新しい光を与えるべきだと考える。

筆者がそのように考えるのは，人間主義的解釈のほうが，紀元前五世紀における啓蒙主義的な知的風土により適合的であり，その姿をより適切に映し出していると思うからである。紀元前五世紀は，イオニア自然哲学の学問的伝統が開花し，人間と世界に対する知的探求が展開されていた時代である。また，民主政の普及に代表される社会的発展に伴い，新しい価値観が生まれていた時代でもある。人間尺度説を，そのような時代の価値観を端的に表明したスローガンとして理解することにより，われわれは，より妥当な解釈を手に入れることができるように思われる。

以上のことを論じるために，本論文では，まず２章において，人間尺度説をめぐるプラトンのテキストを取り上げ，プラトンを典拠とした現代的解釈が，テキストに対する誤解に基づくものであり，それゆえ，現代的解釈が成り立たないことを明らかにしたい。

続く３章から，人間尺度説の文言の意味をめぐる考察に入る。第３章では，まず，人間尺度説を理解するための鍵となる「尺度（メトロン）」の概念について，その意味を明確にする作業をおこなう。紀元前五世紀においてこの概念が持っていた含意を詳細に分析することによって，人間が尺度であるという主張の真意が明らかとなるであろう。

４章では，３章の考察をふまえて，人間尺度説におけるその他の鍵概念の意味を解明していくことにしよう。

以上の考察によって，われわれは，人間尺度説が紀元前五世紀という時代において持ちえた含意を明確にすることができるであろう。

２．人間尺度説をめぐるプラトンの解釈

2.1 人間尺度説とプラトン

プラトンのテキストをめぐる現代的解釈の評価に入るまえに，まずは，プロタゴラスに対するプラトンの発言の信憑性を，どう評価するべきかについて考えたい。プラトンは，プロタゴラスの思想について，どの程度の情報を，どの程度正確に知りえたのであろうか。

この問題に関して，まず注意すべきは，その年代の隔たりである。近年の推定では，プロタゴラスは，おそらく紀元前490年前後に生まれている[6)]。これに対して，プラトンの生年は紀元前427年であり，その間には，60年前後の隔たりが存在している。この半世紀あまりの間に，ソフィストたちの資料は急速に失われていったと推測することができる。プラトンの時代に，プロタゴラスの著作がどの程度残存し，流通していたのかは不明であるが，『プロタゴラス』においてプラトンがプロタゴラスの口から語らせている社会発生論の神話や，詩人批判の議論は，おそらくは，じっさいのプロタゴラスの著作を下敷きにしていると考えることができるから，彼がプロタゴラスに由来するさまざまな資料を参照しえたことは確かなことだと考えられる。

それでは，人間尺度説をめぐる資料はどうであろうか。プラトンは，この文言が含まれていたとされる，彼が『真理（Ἀλήθεια）』を呼ぶ著作[7)]を，資料として目にすることができたのであろうか。人間尺度説の文言自体は，プロタゴラスの著書の冒頭に登場する文句として，当時からよく知られた文言であったろうから，プラトンが著書を直接読んでいなくても，その情報を手にすることができたであろう。それゆえ，プラトンが人間尺度説を伝えているという事実は，彼がプロタゴラスの著作の内容を知っていたことの証拠にはならない。

もし，プラトンが，この書物の全容を知っていたのであれば，『テアイテトス』のなかで言及があってしかるべきであろう。ところが，じっさいには，そのような言及はみられない。たしかに，プラトンは，この書物を，真理について論じた著作だと述べている。だが，これは，著作が『真理』と呼ばれていたこと

からの推測であると考えるのが妥当ではないだろうか。

じっさい，この著作の内容については，さまざまな推測が成り立つ。弁論術の技術に関連する書物であった可能性も高い。書名にしても，セクストス・エンペイリコスは，同じ著作を『打倒論（Καταβάλλοντες）』という名で呼んでおり[8)]，『真理』という題名は，おそらくはさまざまに存在していた呼び名のひとつであったと考えられる[9)]。また，この書物が『真理』と呼ばれていたからといって，それがプラトンの考えるような「真理論」であった可能性は薄い。なぜなら，真理論という哲学的議論自体がこの時代に存在していたか不確かであるばかりか，プロタゴラスがそのような哲学的議論を展開したと考えるべき証拠がないからである。同時代のアンティフォンの著作『真理について』を見ても，その内容は真理論ではなく，百科全書的な内容を持っている。プロタゴラスの著作も，同様のものであった可能性が高いのではないだろうか。『真理』という題名は，「プロタゴラスが真理と信じる内容が記された書物」という意味であったと考えるのが妥当であるように思われる[10)]。

このように，プラトンがプロタゴラスの著作の全容を知っていた可能性は薄い。それでは，プラトンは，人間尺度説の内容に対するさらなる情報を，なんらかの別のかたちで手にすることができたであろうか。これも難しいように思われる。なぜなら，この文句は，ソフィストの常套手段であるプロパガンダ的宣言であると考えられ，プロタゴラス自身が，その意図についての詳細な解説をしたとは考えにくいからである。

じっさい，人間尺度説をめぐるプラトンの説明において，プロタゴラス自身の解説に基づいていると見なせるものはない。プラトンがおこなっているのは，人間尺度説をめぐる彼自身の解釈の提示であり，彼はそれを，彼自身の認識論の枠組のなかで解釈し，提示しているのである。

以上の考察が正しければ，われわれは，次のような仮説を立てることができるだろう。

まず，プロタゴラスの思想をめぐる直接的あるいは間接的な情報を，プラトンは持っていた。そうした情報源に基づいている以上，プロタゴラスをめぐる

彼の証言は，概して信頼できる。プラトンが意図的な捏造をした証拠はなく，彼は自分が手にしえた情報をもとに，プロタゴラスを批判しようとしたと考えられる。

しかし，人間尺度説については，彼が利用できる情報源は限られていたと考えられる。とりわけ，人間尺度説の具体的内容をめぐる説明については，プラトン自身が，それを認識論の理論と受け止め，自分の認識論的枠組のなかで，それがどのような理論であるのかを分析し，解釈していると考えるのが妥当であろう。

このように，人間尺度説に関するプラトンの証言は，プロタゴラスの著作にもとづくものでも，プラトンが捏造したものでもない。むしろ，それは，プロタゴラスの残した文言を，プラトンが，みずからの哲学的関心と，その哲学的枠組に基づいて解釈したものと考えるべきなのである。

2.2 プラトンと現代的解釈

以上のように，人間尺度説をめぐるプラトンの言説は，限定された情報をもとにした，プラトン自身の解釈であると考えることができる。それゆえ，そこには，プラトン自身の哲学的枠組が強く反映されているはずである。では，みずからの哲学的枠組を通して，プラトンは，人間尺度説をどのような理論として解釈しようとしたのであろうか。すでに見たように，現代の研究者の多くは，プラトンの説明の中に，相対主義が持つ現代的特性を読みとろうとした。すなわち，感覚主義や主観主義，あるいは真理の相対主義などの認識論的立場である。はたして，プラトンによる説明のなかに，そのような立場を読みとることはできるのであろうか。以下，この問題について，考察を加えていきたい。（ただし，本論文の主目的は，人間尺度説の真意の解明にあるため，プラトンのテキストの分析は概略的なものに留めざるをえない。詳細な議論は，別の機会に譲ることとしたい。）

①人間尺度説は感覚主義の理論か

多くの研究者たちは，人間尺度説を，感覚的判断をめぐる理論であると考えている[11)]。この評価は，妥当なものであろうか。

たしかに，プラトンは，テアイテトスが提示した感覚知識説のテーゼに密接に関連する理論として，人間尺度説を提示している。しかし，そのことは，人間尺度説が感覚知識説と同一の学説であることを必ずしも意味しない。むしろ，人間尺度説は，感覚知識説を背後で支える相対的判断一般をめぐる理論として提示されており，それゆえ，人間尺度説自体は，感覚的判断に限定された理論ではないと考えるべきであろう。

じっさい，『テアイテトス』においては，人間尺度説は，感覚的判断だけでなく，思いなし一般に関わる理論として扱われているように思われる。たとえば，Fine は，人間尺度説を「狭いプロタゴラス主義」と「広いプロタゴラス主義」に区別し，プラトンの議論には両方の立場が登場していると考えている[12)]。『テアイテトス』における解釈は，「広いプロタゴラス主義」であり，感覚的判断はその一部であると考えるべきであろう[13)]。

このように考えると，プラトンは，人間尺度説を，人間の判断一般をめぐる理論であると見なしていたことになるであろう。

②人間尺度説は主観主義か

多くの研究者は，プラトンは，人間尺度説を主観主義（subjectivism），すなわち，人間の判断には客観性がなく，主観的で恣意的なものとする立場として提示していると考えている。人間尺度説が，判断の主観性を主張しているのだとしたら，人間の判断はみな恣意的なものだということになるであろう[14)]。さらに，このような主観的な現れをもって「ある」が把握されたとする解釈を究極まで押し進めると，人間尺度説には独我論（solipsism）が含意されているという解釈に至ることになるであろう[15)]。しかし，これらの解釈は成立しがたい。

まず，プラトンは，感覚的判断の成立を主観的で恣意的なものとは見なしていない。じっさい，プラトンは，みずからの感覚の理論を援用して，感覚的判断を客観的な構造を持った客観的なものとして提示している。そこにおいて，感覚的判断の成立は，感覚対象と感覚者の間の物理的な相互作用の結果として説明されており，感覚的判断は客観的に成立している。たとえば，味の感じ方は，個々人によって恣意的なものではなく，個々人の健康状態によって左右されるとされ，健康な人と，病気の人では，味の感じ方が異なるとされている。これは，感覚者の身体状態のタイプに応じて，それに対応する味のタイプが感覚されるということを示しており，感覚的判断は，相対的ではあるが，恣意的ではなく，むしろ規則的なものであることがわかる。

さらに，プラトンが，感覚的判断の成立を，客観的に成立する現象と捉えている以上，プラトンが，人間尺度説を現象主義として理解していないことも明らかであろう。

さらに，各人の判断は私秘的なものではなく，むしろ，公共的で，コミュニケーション可能なものである。たとえば，医者と患者の例を見ると，患者の感覚的判断は私秘的なものではなく，医師に伝達される公共的なものであり，医師と共有可能なものであることがわかる。

以上のように，プラトンは，人間尺度説を，相対的判断の客観的構造を示す理論として解釈しており，判断の主観性や恣意性などは主張していないのである。

③人間尺度説は真理の相対主義か

現代の解釈の多くは，プラトンが，人間尺度説を，真理の相対主義を表明した理論と理解していると解釈している。だが，真理の相対主義は，きわめて現代的な発想に立つ立場であり，現代以前にそのような発想が存在したとは考えにくい。じっさい，そのような発想をプラトンに帰属させることには，多くの問題が存在している。

まず，プラトンのテキストに基づいて人間尺度説を理解しているアリストテレスやセクストスにおいても，真理の相対主義という発想を見ることはできな

い。もし，プラトンが人間尺度説を真理の相対主義として提示していたのであれば，どうして，後代の哲学者たちは，ことごとく，それを誤解したのであろうか。

さらに，この解釈に問題があることは，プラトンのテキストそのものからも明らかである。というのも，テキストにおいて，「～にとって真」という表現が登場するのは，ごく少数にすぎず，なんの限定もつけない用例のほうが圧倒的に多いのである[16)]。特に，プラトンにとって最も重要な論駁であるはずの「ペリトロペー」の議論においては，その論駁の重要な部分において，「～にとって」という限定が欠落しているのである。もし，プラトンが，「～にとって真」という相対的真理の概念を論駁しようとしているのであれば，彼がそのような不注意な記述をするとは考えられない。

では，プラトンが人間尺度説を真理の相対主義とみなしてはいないのであるとしたら，プラトンはそれをどのような真理の理論と見なしていたのであろうか。筆者の考えでは，プラトンは，人間尺度説を，通常の真理概念の枠組の中で理解していた。すなわち，プラトンにとって，人間尺度説は，各人の下す判断（「～にとってある」）を，すべて端的に真なる判断と認める理論なのであり[17)]，そこでは，互いに食い違う判断も，すべてが同等に真なる判断として認められなければならないのである[18)]。

だが，このような理解は，判断の相対性と矛盾をきたすように見える。なぜなら，矛盾する判断が，等しく真となってしまうからである。じっさい，アリストテレスが，人間尺度説を，矛盾律を否定する理論として批判した理由はここにある。

それでは，プラトンは，この問題にどう対処しようとしたのであろうか。筆者は，プラトンが議論の中に万物流動説を導入した理由はそこにあると考える。というのも，万物流動説においては，なにひとつ同一の状態にあるものはなく，世界は，あらゆる面で変化し続けているからである。それゆえ，甲にとっての「風は冷たい」と，乙にとっての「風は温かい」は，風に対する同時的な判断ではないことになり，矛盾律は犯されないのである。

逆に，人間尺度説が相対的真理の理論であるとしたら，人間尺度説の世界観に密接に関わる理論として，万物流動説を導入する必要性が消滅してしまう。なぜなら，その場合，世界が流動などしていなくても，人間尺度説は成立し，それゆえ，感覚知識説も成立するからである。

このように，人間尺度説に対するプラトンの解釈は，現代の解釈が想定するようなものではなかったと考えることができる。プラトンにとって，人間尺度説は，個々人の判断の相対性を主張し，異なる判断がすべて真であるとする理論であったが，それは，主観主義や現象主義ではなく，客観的な認識理論であり，真理の相対主義に立つものでもなかったのである。

以上で，人間尺度説を現代的な相対主義の認識理論として解釈することは，妥当ではないことが明らかになった。それでは，われわれは，プラトンがじっさいに提示しているような相対的判断をめぐる真理の理論として，人間尺度説を解釈すべきなのであろうか。次章では，人間尺度説の真意をめぐる具体的な解釈の作業に入ることにしよう。

３．「尺度（メトロン）」とは何か

3.1 プラトンの解釈

プラトンは，人間尺度説を，個々人の判断の相対性を主張する認識論的理論であり，個々人の判断がすべて真であるとする真理の理論であると考えている。このプラトンの理解は正当なものなのであろうか。それとも，人間尺度説の本来の意図は，それとは異なるものなのであろうか。

これを考察するために，われわれは，まず，人間尺度説における鍵概念である「尺度（メトロン）」の解釈を取り上げることにしたい。というのも，筆者はそこに，プラトンによる解釈の最大のひずみが現れていると考えるからである。

メトロンをめぐるプラトンの説明は複雑である。彼は，メトロンを「クリテーリオン（κριτήριον）」という概念に置き換え，それによってメトロンの意味を説明しようとしている。この置き換えはセクストスの説明にも見られるが

(*Pyr. Hyp.* 216)，セクストスが二つの言葉を単純に同義と見なしているように思われるのに対して，プラトンは，クリテーリオンの意味をめぐる詳細な解説を加えている[19)]。

プラトンは，178b3-7, b9-c2において，メトロンを「クリテーリオンを内に持つ ἔχων … τὸ κριτήριον ἐν αὐτῷ（178b6, c1）」ものと表現している。このクリテーリオンを，プラトンは，「判断（κρίνειν, κρίσις = 分けること）がなされる場所」と説明している。この場合，人間がメトロンであるということの意味は，「あるとあらぬを分ける（判断する）働きをその内に持っているもの」というものになるだろう。

このような解釈に従うとき，メトロンとは，ようするに「命題的判断（すなわち，「～である・あらぬ」）を下す判断主体」であることになるだろう。だが，このプラトンによるメトロンの解釈は，通常のメトロンの意味から逸脱しているように思われる[20)]。

伝統的なメトロンは，何かを計測・計量するための基準となる一定の度量であり，またその度量を示す道具である。そこには，計測者と尺度と対象という三項構造が成立しており，「計測者が尺度を使って対象を計測・計量する」という図式が成り立っている。メトロンとは，対象が計測されるのに必要な基準であり，計測者そのものではない。

ところが，プラトンの説明においては，判断は，判断者と判断対象という二項構造によって成立しており，このうちの判断者がメトロンであるとされている。いってみれば，計測者―尺度―対象のうち，計測者と尺度が一体化していると考えることができる。しかも，プラトンにおける判断者は，そもそも計測基準などなしに対象の「ある」を判断するがゆえに，尺度を必要としていない。すなわち，プラトンの図式のなかには，そもそも尺度に該当するような要素は存在せず，プラトンは，ほんらいは尺度とはいえないものを，尺度と呼んでいるのである。

なぜ，このような尺度の意味の逸脱が生じたのであろうか。それは，プラトンが，人間尺度説の意味を，みずからの認識論的問題の枠組に当てはめて解釈

しようとした結果であるように思われる。プラトンの認識論の問題意識では，このような意味での尺度は，必要ない。それゆえ，プラトンは，人間尺度説をみずからの議論に引き入れるために，このような解釈を当てはめようとしたのではないだろうか。

それゆえ，われわれは，このようなメトロンの説明を受け入れる必要はない。むしろ，この概念は，紀元前五世紀以前からの伝統的用法の中で理解されるべきだと思われる。そこでつぎに，伝統的なメトロンとはどのようなものであるのかについて，詳しく見ていくことにしよう。

3.2 伝統的なメトロン概念

メトロンが紀元前五世紀以前に持っていた伝統的な含意とはどのようなものであったのだろうか。そこには，以下の三つの特徴を指摘することができる。

①計測と分節化

メトロンは，なによりもまず，計測のための単位であり，また，その単位に従った計測のための道具である。メトロンとは，土地や穀物やワインなどの量を規定する一定の度量（たとえば，１リットル）であるとともに，それを計測・計量する道具（たとえば，１リットルの計量カップ）であり，さらには，計量された一定の分量の事物（たとえば，１リットルのワイン）をさす[21)]。

このように，メトロンとは，事物に限度を与え，分節化するものだといえる。世界に存在する事物は，メトロンなしには，明確なかたちをもたず，無限定的である。メトロンという限度が与えられることによって，事物は，その限度との関係において，量的に計測され，一定の形を持ったものとなるのである。（たとえば，樽に入ったワインは，１リットルの計量カップで計量されることによって，Ｘリットルのワインとして限定づけられる。）

メトロンとは，プラトンが解釈したような，対象のありかたを判断する主体のようなものではない。メトロンは，物事に限度を与え，限度を与えることによって，世界を分節化する。メトロンの役割は，対象のありかたを認識するこ

とではなく，対象に限度を与え，計測可能なものにすることにある。

②人間の身体部分としてのメトロン

このような計測・計量のための度量・道具としてのメトロンは，人間を基準として作られている。というのも，計測のための尺度として伝統的に使われてきたのは，人間の身体部分であるのが通常だからである。古代ギリシャでは，「プース（足を基準にした長さ・面積の単位）」，「ダクテュロス（指を基準にした長さの単位）」，「ペーキュス（腕を単位にした長さの単位）」など，人間の身体部分の名称が，そのまま尺度として使用されている。尺度は，伝統的に，人間の身体のサイズに合致し，適合したものであることがわかる。

しかし，尺度が，人間を基準としたものであるからといって，それは主観的なものでも，恣意的なものでもない。たしかに，人間の身体が特定のサイズをしているのは，偶然的なことであり，それゆえ，その単位の分量も偶然的に選ばれたものである。しかし，人間はそのような偶然的な大きさを持つ自己の身体を単位にして，はじめて，世界を客観的に把握することができるのである。逆に，尺度が，人間的な分量から隔たったものであるなら，人間は，その尺度によって世界を計測することができなくなるであろう。メトロンが人間に合致したものであるからこそ，それはメトロンとして機能しうるのである。

③適度としてのメトロン

伝統的なメトロンの概念において，もうひとつの注目すべき特徴は，それが「適度」という含意を持ち，人間が従うべき中庸という道徳的含意につながっていることである。そこにおいて，メトロンは，人間に与えられた分限や限度を示しており，そこには，人間は人間としての分限を越えてはならないという倫理的意識が現れている[22)]。

このような含意からわかるように，メトロンという限定の原理は，物事を，たんに恣意的に限定するものではなく，その物事が持つ本来のありかたにしたがって，それを適切に限界づけるものだといえるであろう。道徳的な含意が生

じるのも，人間には，ほんらいのあるべき姿が存在し，その身の丈（人間の限度）を規定する限度こそがメトロンだという意識があるからだと考えることができる。

3.3 紀元前五世紀におけるメトロンの含意

このような伝統的なメトロンの概念は，紀元前五世紀になると，新しい含意が付加されていき，この時代の文化を特徴づける象徴的な概念になっていったと考えられる。以下の二つの特徴が重要だと思われる。

①世界の計測と分節化

物事に限界を与え，それによって世界を分節化し，かたちを与えていくメトロンは，イオニア自然哲学の伝統において，特徴的に姿を現わしているように思われる。

イオニア自然哲学の本質は，世界を合理的に理解しようとする欲求にあるといえるが，そこでは，宇宙を支配する原理によって，世界がいかに構造化されているかが重要な問題となる。このとき，原理（アルケー）は，世界を限定する原理であり，その力が働くことによって，世界はひとつの調和を持った全体となる。そのような適切な限定を世界に与える原理として，自然哲学において，メトロンは重要な概念であった[23)]。

メトロンは人間と知的探求と密接な関係を持つ。自然哲学の発想では，世界にはメトロンが内在しており，人間の知性は，このメトロンを見て取ることによって，世界を分節化して，その姿を捉えることができるのである。メトロンを介して，人間の知性と世界はつながっているのだといえる[24)]。

アナクシマンドロスは，宇宙の構造を探求し，人間の住む世界を地図というかたちで表現しようとした。このような，世界の姿を明らかにしようとする学問的関心は，自然哲学を超えて，地理学や民俗学の研究へと発展していくことになる[25)]。アナクシマンドロスの弟子といわれるミレトスのヘカタイオスは，みずから地中海世界を旅行して調査し，地誌を執筆したとされている。また，

アナクシマンドロスの地図を発展させたヘカタイオスの地図を作成している。

紀元前五世紀は，こうした伝統のなかで，世界の姿を調査し，明らかにする学問が発展していった時代である。イオニア自然哲学の伝統の中に位置するヘロドトスは，ヘカタイオスの研究を発展させ，『歴史』を完成させたが，その内実は，現在でいう歴史研究に留まらず，ギリシャ人たちの知る世界全体を，地理や文化の詳細な記述を交えて，考察するものであった。このヘロドトスの著作には，計測のモチーフが随所に現れており，彼にとって，世界の計測は重要な意味を持っていたことがわかる[26)]。

このように，紀元前五世紀は，人間の知性による世界の解明が進展していた時期であり，知性が世界を分節化していくためのメトロンの重要性が増していった時代であったといえるであろう。

②文明化と貨幣経済

紀元前五世紀は，自然哲学とそれに触発された新しい学問の発展だけでなく，政治的・経済的にも社会が発展していった時代である。特に，民主政の発展は，イソノミアの概念を普及させたが，これは経済的な分配の平等を帰結するものであった。

そのような社会的変化と並行するかたちで，ギリシャ世界では，貨幣が登場し，貨幣経済が普及していった。貨幣が存在しなかった時代の富とは異なり，貨幣という財は，価値に共通の尺度を与え，社会的な交換を均等化し，合理化していく。貨幣という共通の尺度は，人間の社会を合理化し，文明を作り出していく象徴的な原理となるのであり，紀元前五世紀は，そのような社会の合理化が進展していった時代であったといえる[27)]。

3.4 メトロンと人間原理

以上，われわれは，メトロンが持っていた伝統的含意と，紀元前五世紀になって，この概念が新たに獲得していった含意を見てきた。このような視点から見ると，プロタゴラスが人間をメトロンとして位置づけた意図が見えてくるよ

うに思われる。

すなわち，一言でいえば，プロタゴラスが人間をメトロンとして位置づけたのは，まさに文字通りの意味において，人間が世界に合理的な限定を与え，世界を秩序化し，世界に調和的なかたちを与える存在だからなのである。

このとき注意すべきは，プラトンにおける解釈との違いである。プラトンにおいて，人間がメトロンであるということは，個々人が，たとえば，「風はわたしにとっては冷たい」のように，特定の命題的内容の真偽を決定する特権を持つということを意味していた。このとき，個々人の判断は個別的であり，相対的である。人間がメトロンであるとは，このような世界の個別的な事象をめぐる判断の特権的な担い手であるというにすぎず，それ以上の含意はない。すなわち，そこには，これまで明らかになってきたメトロンの含意，すなわち，世界を計測して分節化し，秩序化していくという側面が存在していないのである。

これまでの考察で明らかになったメトロンの含意に従えば，人間は，世界の個別的事象の真偽を決定する特権を持った存在ではなく，世界全体を分節化して，そこに明確なかたちを与えていく存在である。人間は，みずからの経験を通して，みずからが世界を限定づけるメトロンとなり，それによって世界を解明し，そこに秩序を与えていくのである。

人間尺度説は，たんなる人間中心主義の表明ではない。人間は世界の中心にある特権的な存在ではないし，ましてや，恣意的に真理や価値を創造できるような存在でもない。むしろ，人間尺度説が表明しているのは，人間と世界の関係性を示す新しい考え方だといえる。すなわち，世界の姿や世界の秩序は，人間の知的経験を通して，はじめて解明され，実現していくものなのである。人間尺度説は，このような世界と人間の関係性をめぐる新しい考え方を表明するものなのだといえるだろう。

４．人間による世界の経験：人間尺度説の真意

4.1「人間」について

これまでの考察によれば，人間は，世界を知的に経験することによって，世界を分節化し秩序づけるメトロンとしての役割を担う存在であった。われわれは，人間尺度説の文言全体を，そのようなメトロンとしての人間という視点から解釈していかなければならない。では，このような視点からみたとき，人間尺度説における「人間（アントローポス）」とはどのようなものと理解されるべきであろうか。

「アントローポス」の意味について，これまで提示されてきた解釈は，大きく三つに類型化される。まず，簡単にまとめておこう。

①アントローポスを人間一般（種としての人間，人類）とする解釈。この解釈は，アントローポスを個々の人間だとするプラトンの解釈に反対し，人類全体が言及されていると主張する。すなわち，そこでは，人間は，神や動物との対立項として取り扱われており，神ではなく，人間が尺度なのだと述べられているというのである[28)]。

②アントローポスを，個々の人間とする解釈。これは，プラトンの証言に由来するものであり，一般的には，主観主義を含意するとされている。しかし，すでに見たように，そのような解釈は成り立たない。プラトンの解釈においても，判断は主観的ではなく，客観的であり，公共的なのである。さらに，プラトンの証言でも，人間のグループが尺度とされる場合もある。それゆえ，「人間」は，主観的判断の主体となるような個々人とはいえないのである[29)]。

③第三の解釈は，②の問題点を修正し，個人も集団も，同様に尺度となりうるものと考えている[30)]。そのために，この解釈では，個々人の恣意的な主観主義ではなく，健康な人間と病気の人間，あるいはポリスの市民たちといった，なんらかの性質を共有する人間のグループによる判断を想定する。

以上の解釈のうち，われわれは，どの解釈を採用すべきであろうか。まず，②はプラトンの解釈をめぐる現代的解釈に由来するものであり，このような考

え方を取る必要はない。プラトンは，判断は個々人だけでなく，集団としても存立し，しかも，その背後には判断を成立させる客観的な構造が存在すると考えていた。その意味では，③の解釈のほうがプラトンの解釈に近いといえるであろう。

しかし，それは，①の解釈と矛盾するわけではない。人間尺度説で述べられている人間とは，世界を経験する人間一般だからである。それゆえ，われわれは，人間尺度説においては，①のように，人間全体が考えられているが，その人間がメトロンとして世界を分節化するのは，③のような個々の人間や，その集団の経験を通してであると考えることができるだろう。

4.2「万物（パンタ・クレーマタ）」について

人間尺度説をめぐるわれわれの解釈が正しければ，人間が尺度となることによって分節化されていく対象は，世界そのものである。人間尺度説では，それは「万物（パンタ・クレーマタ）」と表現されている。それは，どのようなものだろうか。

第一に，紀元前五世紀において，探求の対象となる世界とは，自然哲学が探求し，解明しようとした世界である。自然哲学において「パンタ」とは，自然世界全体を表現する言葉であった。人間尺度説においても，このような有機的な全体としての世界が意味されていると考えるべきであろう。

従来の解釈では，人間尺度説における「パンタ」は，個別的な個物や事態の集合体として捉えられ，人間はそのような個別的な個物や事態のありかたを命題的に把握するものと理解されてきたように思われる。これは，プラトンの解釈に依拠したものであり，そのように解釈するなら，世界はたんなる個物の集合体にすぎなくなる[31)]。だが，われわれの解釈が正しければ，世界とは，尺度である人間によって分節化され，それによって調和的な姿を現わすようなものであった。それゆえ，われわれは，従来の解釈を採用すべきではない。

第二に，このパンタに対して，「クレーマタ」という限定がなされていることが重要だと思われる。クレーマタとは，「使う」という動詞から派生した言

葉であり，「人間によって使われるもの」「人間の役に立つもの」という含意が強い。これは，同様に事物一般を意味する語である「プラーグマタ」と比べると，きわだった特徴だといえる[32)]。プロタゴラスが，世界をたんに「パンタ」ではなく，「パンタ・クレーマタ」と表現したのは，なぜなのだろうか。

ひとつの解釈は，アナクサゴラスの影響を想定するものである。アナクサゴラス（DK59B1）には「パンタ・クレーマタは一緒にあった」という記述が見られる。それゆえ，プロタゴラスは，アナクサゴラスの哲学の枠組の影響を受けていると考えるのである[33)]。

だが，プロタゴラスの認識理論の背後にアナクサゴラスの哲学が存在するという見方は，セクストスによる認識論的説明によるところが大きい。セクストスの解釈は，プラトンの解釈のヘレニズム的な焼き直しであると考えられ，それゆえ，背後にアナクサゴラスの認識論があるとする想定は，妥当とはいえないように思われる。

もうひとつの解釈は，クレーマタを，人間が使うという視点から捉え，プロタゴラスはあえて，世界をそのような人間的なものとして表現しようとしているというものである[34)]。この解釈は，人間尺度説をめぐるわれわれの解釈に合致し，プロタゴラスの意図をよく説明するものといえる。プロタゴラスは，それまでの自然哲学の探求対象である世界を人間化し，世界を，人間と密接に関連したものと捉えようとしているのではないだろうか。この場合，プロタゴラスは，自然哲学の伝統のなかで，世界を人間化しようとしていることになるであろう[35)]。

4.3「ある」と「あらぬ」について

「万物の尺度は人間である」という文言の後に，「あるものについては，あるということの。あらぬものについては，あらぬということの（τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστιν,τῶν δὲ οὐκ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν）」という文言が付加されている。これは，どのような意味に理解すべきであろうか。

ここでの最大の問題は，「ある」「あらぬ」の意味をめぐる問題である。これ

については，大きく三つの立場が存在する。すなわち，(1)「～がある」「～があらぬ」という，対象の存在や非存在が意味されているとする立場，(2)「～である」「～であらぬ」という，対象の述語的な性質が意味されているとする立場，(3)「ほんとうに～である」「ほんとうに～であらぬ」という，発言の真理性が意味されているとする立場の三つである[36)]。

このうち，(1) の解釈を支持することはできない。なぜなら，プラトンをはじめとする証言は，「ある」「あらぬ」を，「風は冷たい」のように，述語的な意味を持つものとして，命題的に理解しているように思われるからである。それゆえ，われわれは，(2) (3) のいずれかを採用すべきであろう。このうち，(3) については，近年有力となっている解釈であるが，われわれの解釈においては，これを採用することはできない。なぜなら，この解釈は，プラトンによる解説をめぐる現代の解釈から生まれたものであり，そのような解釈が不適切であることは，すでに明らかにされているからである。人間尺度説の真意が真理論にはなく，尺度であるとは真偽の決定者であるという意味ではない以上，ここで，「ある」「あらぬ」が真理に関わる含意を持つとは考えられないのである。それゆえ，われわれは，(2) の立場を採用すべきである。われわれの解釈では，メトロンとしての人間は，命題の真偽を判定する存在ではなく，世界のありかたを計測する存在であった。このとき，人間が計測するのは，世界におけるさまざまな対象の量的・性質的なありかたなのである[37)]。

この文言に関して，従来の解釈との関わりで，もう一点注意すべきことがある。プラトンに依拠した従来の解釈においては，判断者によって判断が下されるとき，その真偽を決定するのは判断者であり，判断者の判断によって，判断内容が確定される。たとえば，判断者に風が冷たいものとして現れて，判断者が「風は冷たい」と判断したとき，はじめて，風は冷たいものとなる。だが，当該の文言は，このようには解釈できないように思われるのである。というのも，「あるものについては，あるということの」という表現は，判断の成立以前に，すでに対象が特定のありかたをしていることを含意しているからである。人間は，対象のありかたを特権的に定める主体なのではなく，むしろ，対象が

あるとおりに，その姿を明らかにしていく存在なのである。たとえば，風は，判断者が冷たいと判断したとき，その性質が生じるのではない。むしろ，すでに特定のありかたをしている風が，人間がメトロンとなることで，その姿を明確に現わすのである。

5．おわりに

以上，われわれは，人間尺度説の真意を考察してきた。一言でまとめれば，人間尺度説とは，プロタゴラスによる紀元前五世紀の知的精神の表明であり，世界を秩序づけるためにメトロンの重要性が増していた紀元前五世紀において，世界の姿を解明し，秩序づけるメトロンたりうるのは，人間自身であることを宣言したものだということができる。

この思想は，世界に対する個々人の判断が相対的であり，個々人の判断がそのまま真理と認められるとする相対主義とは，まったく異なる考え方に立っており，それゆえ，われわれは人間尺度説を，相対主義の宣言とすることはできない。

また，この思想は，一見すると，人間中心主義の宣言のようにも見えるが，そうではない点に注意する必要がある。人間中心主義の思想は，人間を世界の中心に位置づけ，人間に世界を支配する特権を与える。これに対して，人間尺度説においては，人間は世界の主人ではなく，世界のメトロンである。ここには，世界と人間の親和性と共通性が想定されており，人間の知性が，世界の構造に合致したものであるからこそ，人間は世界を認識し，世界を秩序づけるメトロンとしての役割の担いうるのである。

人間尺度説は，紀元前五世紀の知的風土を背景にして主張されたものであり，プロタゴラスの啓蒙主義的世界観の表明と考えることができる。そのような，彼の基本的なスタンスを示すものであるからこそ，彼はそれを著作の冒頭で宣言したのである。その意味で，人間尺度説は，プロタゴラスの思想の出発点であり，その基盤であるということができるであろう。

プラトンにおいては，そのような発想は存在しない。プラトンの生きた紀元前四世紀の哲学的枠組，とりわけ，彼自身の認識論的枠組みは，このような発想を許さなかったと言うべきであろう。プラトンの解釈が生まれたのは，時代精神の変化の結果といえるのではないだろうか。

文献表

Baghramian［2004］Baghramian, M., *Relativism,* Routledge, 2004.

Buchheim［1986］Buchheim, T., *Die Sophistik als Avangarde Normalen Lebens*, Flex Meiner, 1986.

Burnyeat［1976］Burnyeat, M. F., 'Protagoras and Self-refutation in Plato's *Theaetetus*', *Philosophical Review* 85(1976), 172-195.

Classen［1989］Classen, C. J., 'Protagoras' Aletheia' in Huby, P. & Neal G. (eds.), *The Criterion of Truth,* Liverpool University Press, 1989, 13-38.

Cornford［1935］Cornford, F. M., *Plato's Theory of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul, 1935.

Dodds［1973］Dodds, E. R., 'The Sophistic Movement and the Failure of Greek Liberalism', in Dodds, E. R., *The Ancient Concept of Progress and other Essays on Greek Literature and Belief*, Clarendon Press, 1973, 92-105.

Fine［1996］Fine, G., 'Protagorean Ralativisms', *Proceedings of Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 10(1996), 211-243.

Fine［1998］Fine, G. 'Plato's Refutation of Protagoras in the Theaetetus', *Apeiron* 31(1998), 201-234.

Gomperz［1911］Gomperz, Th., *Griechische Denker* Bd.1 (3. Aufl.,), Veit & Comp, 1911.

Gomperz［1912］Gomperz H., *Sophistik und Rhetorik*, Teubner, 1912.

Grote［1950］Grote, G., *A History of Greece* Vol.8, John Murray, 1950.

Guthrie［1971］Guthrie, W. K. C., *The Sophists*, Cambridge University Press, 1971.

Huss［1996］Huss, B., 'Der Homo-Mensura-Satz des Protagoras', *Gymnasium* 103(1996), 229-257.

Kerferd［1950］Kerferd, G. B., 'Plato's Account of the Relativism of Protagoras', *Durham University Journal* 42(1950), 20-26.

Ketchum［1992］Ketchum, R., 'Plato's "Refutation" of Protagorean Relativism: *Theaetetus* 170-171', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 10(1992), 73-105.

Lee［2005］Lee, M., *Epistemology after Protagoras*, Clarendon Press, 2005.

Levi［1940］Levi, A., 'The Man-Measure Principle: its Meaning and Applications', *Philosophy* 15(1940), 147-167.

Mosteller［2008］Mosteller, T., *Relativism: A Guide for the Perplexed*, MPG Books, 2008.

Mansfeld［1981］Mansfeld, J., ' Protagoras on Epistemological Obstacles and Persons', in Kerferd, G. B.(ed.), *The Sophists and their Legacy*, Franz Steiner, 38-53.
Nestle［1941］Nestle, W., *Vom Mythos zum Logos* (2. Aufl.), A. Kröner, 1941.
Schiller［1907］Schiller, F. C. S., *Studies in Humanism,* Macmillan, 1907.
Schiller［1908］Schiller, F. C. S., *Plato or Protagoras?*, Blackwell, 1908.
Seaford［2004］Seaford, R., *Money and the Early Greek Mind*, Cambridge University Press, 2004.
Untersteiner［1967］Untersteiner, M., *I Sofisti* 1, Lampugnani Nigri, 1967.
Vernant［1962］, Vernant, J. P., *Les Origines de la Pensée Grecque*, Presses Universitaries de France, 1962.
Versényi［1963］Versényi, L., *Socratic Humanism*, Yale University Press, 1963.
Versényi［1962］Versényi, L., 'Protagoras's Man-measure Fragment', *American Journal of Philology* 83(1962), 178-184.
Vlastos［1956］Vlastos, G., *Plato: Protagoras,* Liberal Arts Press, 1956.
中澤［2010］中澤務「『プロタゴラス』翻訳ノート」，関西大学『文学論集』，60-2（2010），55-83頁

注

1）Sextus Empiricus, *Adv. Math.* 7. 60（DK80B1）. これとほぼ同じ文言が，プラトン『テアイテトス』152a2-4にも登場している。プラトンでは，"πάντων χρημάτων μέτρον ἄνθρωπος εἶναι, τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστιν,τῶν δὲ μὴ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν." と表現されており，間接話法であることと，否定辞に μὴ が使われている以外は同じである。なお，人間尺度説に関する証言を残している古代の著述家としては，プラトン（*Tht.* のほか，*Crat.* 386a,c, 391c），アリストテレス（*Metaph.* 4.4-11.6, 10.1），セクストス・エンペイリコス（*Pyr. Hyp.* 1. 216-219, *Adv. Math.* 7. 60-63, 389-390），ディオゲネス・ラエルティオス（IX, 51），盲目のディデュモス（四世紀のキリスト教神学者で，Tura で発見されたパピルス文書に含まれる新発見の断片にプロタゴラスへの言及がある）などがある。
2）Schiller［1907］, Schiller［1908］.
3）E.g. Grote［1850］ch.67, Schiller［1908］.
4）相対主義をめぐる現代の解説書の多くは，プロタゴラスの人間尺度説を相対主義の源流として捉えている。たとえば，Baghramian［2004］, Mosteller［2008］など。
5）E.g. Burnyeat［1976］.
6）中澤［2010］60を参照。
7）*Tht.* 161c4.（DK80B1）
8）*Adv. Math.* VII60（DK80B1）
9）このほか，Bernays は，ポリュピュリオスが言及している『存在について（Περὶ τοῦ ὄντος）』というプロタゴラスの著作を，『真理』と同じものと考えている。DK80B2の脚注を参照。

10）DK80B1の脚注を参照。また，Ketchum［1992］76(n.7) も同様の見解を述べている。『打倒論』という書名は，この著作が，論争的な内容を持つものであることを示唆しており，おそらくは，プロタゴラスの言論の技術をめぐるものであったと推測することができる。この点について，Lee［2005］24-5, 27は，この著作がプロタゴラスのいわゆる「対立論法」の技術を解説したものであり，哲学的というよりは，教育的目的を持つものあったと推測しているが，この推測は蓋然性が高い。
11）E.g. Cornford［1935］32-6, Kerferd［1950］.
12）Fine［1996］.
13）Fine は，『テアイテトス』の議論においては，「狭いプロタゴラス主義」と「広いプロタゴラス主義」両方の立場が登場し，「狭いプロタゴラス主義」から「広いプロタゴラス主義」への移行が為されていると解釈するが，プラトンの意図は一貫して「広いプロタゴラス主義」であり，それが感覚知識論というより狭い理論に適用されていると考えたほうが妥当ではないだろうか。これと同様の見解は，Versényi［1962］179, Versényi［1963］19 ff. でも支持されている。
14）Guthrie［1971］169-175, Vlastos［1956］xii-xxiv, Burnyeat［1976］182, Ketchum［1992］.
15）たとえば，Ketchum［1992］73-74は，プラトンはプロタゴラスに独我論と帰していると考えている。また，Burnyeat［1976］182では，プロタゴラスにおいては，個々人はみな自分の私的世界（a private world）に住むものと解釈されている。
16）「真である」という表現が登場するのは，30箇所あまりあるが，そのうち，限定句が付されているのは，160c7, 161d3, 170d5-6, 170e4-5, 171c6-7, 178b6-7の6箇所にすぎない。
17）このような立場は，人間尺度説の解釈として，最近になって有力になってきたものであり，「無謬説（infallibilism）と呼ばれている。代表的な論者として，Fine［1998］, Lee［2005］など。筆者も，彼らと同様の立場に立つ。
18）たしかに，『テアイテトス』の議論のなかには，「～にとって真」という表現が登場しているのも事実であり，これが真理の相対主義を支持する根拠となってきた。しかし，限定句が付されている箇所の文脈をよく見ると，特定の強調的な文脈であり，必ずしも真理の相対主義を表明したものと解釈する必要はないのである。そのような文脈を分類すると，二種類あると考えられる。

（1）160c7, 161d3, 170e4-5, 178b6-7. これらの箇所では，真であるという事態が，特定の判断者が特定の場面において感覚や判断をすることによって成立するということを強調するために限定句が付けられている。すなわち，「真理は，判断者が判断を下したときに成立する」という意味であるに過ぎず，真理の相対性を示すものではない。

（2）170d5-6, 171c6-7. これらの箇所では，追い詰められたプロタゴラスが，反対者の下す判断が真であるということが，その反対者だけでなく，プロタゴラス本人にとってもそう認めざるをえない事態になることを強調している。この場合，与格形は，利害を表現し

ていると考えられる。

19）セクストスの時代には，プラトンの説明を受けて，クリテーリオンがメトロンの原義に近い意味を持つようになっていたのに対し，プラトンの時代には，両概念に隔たりがあり，それゆえ，詳細な説明が必要だったのではないだろうか。

20）この用法が逸脱的であることは，アリストテレスの証言からもうかがえる。*Metaph.* 1153a31-。アリストテレスはそこでメトロンの意味を解説し，われわれは，認識や感覚をもメトロンと呼ぶと述べ，それをプロタゴラスに結び付けている。しかし，アリストテレスは，それは正当な呼び方ではないと考えているように思われる。彼によれば，認識や感覚は，何かを測っているのではなく，むしろ測られている。たとえば，定規によって身体が測られるのであり，身体によって定規が測られるのではないように。アリストテレスが言いたいのは，われわれの感覚が定規のように対象のありかたを規定するのではなく，逆に，対象によってわれわれの感覚が規定されるということであろう。Guthrie［1971］183が指摘しているように，これは，プラトンのクリテーリオンの説明を念頭にしたものであろう。つまり，アリストテレスは，プラトンによる認識主体（クリテーリオン）＝尺度という用法が，元来の尺度の用法を逸脱していると考えている。（なお，Seaford も同様の疑いを表明している。cf. Seaford［2004］285-6）

21）ホメロスの用例を挙げると，「手にメトロン〔土地を測量する棹〕を取って（*Il.* 12.422）」，「千メトロンの酒（*Il.* 7.471）」，「臼引きの大麦20メトロン（*Od.* 2.355）」，「道程のメトラ（＝距離）（*Od.* 4. 389）」など。

22）ヘシオドスにおいては，メトロンは適度や中庸を意味する道徳的概念として登場している。たとえば，『神統記』694行では，「メトラに心を配れ，万事につけカイロスこそ最善である」と述べられている。このメトラは，648行において「海のメトラ」と呼ばれているもの，すなわち，航海における適正な時期と，方法的適正と同じ意味だと考えられ，事柄や事物が本来の限度と適切な限界の内に留まっていることを意味している。また，これと同様の道徳的含意は，「理知という隠れた度を心得ることは，なんと難しいことであろう，この度のみが物事の限界をはかることのできるものなのに（Sol.16）」というソロンの言葉にも見ることができるであろう。

23）たとえば，ピュタゴラス派のフィロラオスでは，世界の中心の火が「自然の要にして尺度」と呼ばれている（DK44A16）。さらに，ヘラクレイトスには，「太陽は尺度を踏み越えるようなことはしないであろう・・・（DK22B94）」という発言が見られる。

24）たとえば，アポロニアのディオゲネスには，「すべてに適度があるというような配分は知性なしには不可能だったろう（DK64B3）」という発言が見られる。

25）このようなメトロンへの注目は，さらには，ヒポクラテス派の医学思想においても見ることができる。たとえば，『古い医術について』９など。

26）たとえば，『歴史』2.127では，ピラミッドの計測について語られている。また，4.99では，スキュティア地域の広さの計測が話題となっている。

27）このような視点については，Vernant［1962］, Seaford［2004］などを参照せよ。

28）Gomperz［1911］362ff. など。解釈史の詳細については，Huss［1996］230-231を参照。

29）Levi［1940］150, Kerferd［1981］86, Mansfeld［1981］43, Classen［1989］16, 27など。解釈史の詳細については，Huss［1996］232-233を参照。

30）Gomperz［1912］217ff., Nestle［1941］273, Guthrie［1969］183, 268など。解釈史の詳細については，Huss［1996］233-235を参照。

31）Guthrie［1969］, Dodds［1973］など。

32）たしかに，クレーマタが事物一般の意味に使われることもあるが，特別な含意を持つ場合も多いと思う。セクストス（*Pyr. Hyp.* 1. 216）は，クレーマタを解説して，プラーグマタのことだと言い換えており，一般的な意味に解しているように思われるが，これは，彼独特の人間尺度説解釈から来るものであろう。

33）Gomperz［1912］251-252, Untersteiner［1967］129など。

34）Nestle［1941］246f., Versényi［1962］182, Versényi［1963］11-13など。

35）cf. Seaford［2004］287ff.

36）(1) 存在として解釈しているのは，Gomperz［1912］201-203, Levi［1940］149, Nestle［1941］271など。(2) 述語的性質として解釈しているのは，Buchheim［1986］62-63など。(3) 真理性として解釈しているのは，Guthrie［1969］190, Mansfeld［1981］43, Kerferd［1981］86など。なお，これらの解釈の分類と解釈史の詳細については，Huss［1996］250-254を参照。

37）それゆえ，われわれは，ὡς の意味をめぐる論争に加わる必要はない。これまで，ὡς が「～であること」ということを示す that 節の意味を持つのか，それとも「いかにあるか」という how の意味を持つのか議論されてきた。だが，われわれの解釈では，これらの二つの意味は重なるものであり，対立はしないのである。

本研究は JSPS 科研費25370036の助成を受けたものです。